

序 章

日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶	2
アメリカ側実行委員長挨拶	3
内閣総理大臣からのメッセージ	4
日米学生会議の歴史	5
過去の参加者からのメッセージ	6
宮澤喜一氏	
ヘンリー・A・キッシンジャー氏	
本文中の略語について	6

日本側実行委員長挨拶

第59回日米学生会議実行委員会

日本側実行委員長 川口 耕一郎

日米関係が「世界で最も成熟した二国間関係」と評される現在、日米を代表する72名の学生が1ヵ月間会議を行う意義とは何か。

日米学生会議（JASC）は、満州事件を契機に悪化する日米関係を憂慮した日本人学生4名によって創設された。創設当初は、貴重な草の根国際交流の場とされ、学生が会議を運営するという新鮮さも相まって、非政府的外交使節団としての役割を大きく期待され、宮沢喜一氏、ヘンリー・キッシンジャー氏などの多くの人材を輩出してきた。だが、80年代から日米関係が良好になり、国際交流が一般化する中で、会議の意義が問われるようになる。

「なぜ、今JASCか」

毎年、各回の実行委員はその間に悩み、一年間「JASC中毒」のように本会議の企画、運営に奔走した後でも、その答えを見つけ出すのは難しい。それは、第59回実行委員会も例外ではない。「学生の、学生による、学生のための会議」と言われるJASCだが、その開催は多くの公的機関、企業、一般市民の方々の善意に支えられている。72名もの学生のための1ヵ月に及ぶプログラムは社会の支援なしでは到底成り立たないものだが、はたしてその支援に見合うだけの社会的意義がJASCにあるのか。委員会発足当初は、実行委員長の私でさえも迷いがあった。

しかし、「時代の変化とともに、相対的にJASCの意義が低下してきたのか」という問いは、会議の本質に真剣に向き合うことからの逃避であることに気付かされた。相互理解の難しさは、1934年も現在も変わらない。日米関係は良好とされる現在であっても、草の根レベルで本当にお互いを信頼できる関係ではない。

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という設立当初の理念。世界大戦が迫りつつある中、第1回会議参加者はJASCを通して単に日米関係の安定に寄与しようとしたのではない。日米間の平和の先にある世界の平和。それこそが彼らが得ようとしていたものであり、70年以上のときを超えて尚JASCに脈々と受け継がれる基本精神である。その点で、JASCの理念は2007年現在でも達成されてはいない。

国際交流を通した「相互理解」、「世界平和」。そんな抽象的な理念を掲げる団体は数多くある。しかし、特定の利益や立場に拘束される大人にそれが可能なか。また、学生の場合はしばしば企画、運営力に限界がある。

宮沢喜一氏は回顧録で、JASCを通して「一生の思い出、

一生の仲間」を得ることができたと振り返る。私も、そして他の実行委員全員も、第58回会議参加者としてその感想に強く共感し、確信を持って言うことができる。「参加者同士の『絆』がJASCの一番の財産である」、と。「絆」などJASCに参加するまで恥ずかしくて使ったことがない言葉だが、それが自然に口に出るようになったのも、JASCの力なのかもしれない。真の相互理解、国際交流の場、それがJASCである。

第58回会議に多くのものをもらった私たち第59回実行委員会、次の会議を通じて何を与えられるか。それを考えたところ、以下のような結論にたどり着いた。1ヵ月にわたる共同生活を通し、日米両国の学生は特定の利益に拘束されない率直な議論を重ね、個人間の絆を深め、異文化間の相互理解に向けて心を開いていくことにより、日米間、個人レベルでの「グローバルパートナーシップ」を探究していく。そして、学生としての可能性を探究すると共に、「会議」という活動を通してその成果を広く社会に還元する。参加者内の相互理解、会議の成果の社会発信の二つを目標に掲げ、第59回日米学生会議は“Advocating Japan-America Participation in Global Change” 「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」というテーマの下で、東京、秋田、広島、京都で開催された。

第59回実行委員会は、会議の質向上のため、学生だけによる企画、運営という従来の体制をあえて踏襲せず、積極的に公的機関、企業、一般市民の協力を得て、準備を進めてきた。このように、多くの方々のご協力を得ることで、分科会、アカデミックなフォーラム、実際に現場を訪れるフィールドトリップ、ホームステイ、文化体験といった全ての活動が有機的に結びつき、参加者の相互理解、信頼醸成を深めていった。そして、現在の日米、そして世界にまたがって存在する諸問題に対する学生の立場からの考察を広く社会に発信し、同年代の学生に国際交流の最前線に立つ我々の活動を知ってもらい、刺激を与えられればとの思いから各開催地で行った一般公開のフォーラムも、地元高校生、大学生を中心に多くの方々にご来場頂き、無事成功を取ることができた。参加者同士が真のグローバルパートナーとなり、次代を切り開いていく。会議の成果を広く社会発信していく過程で、実行委員会が総合テーマに込めた理念は実現されたと感じている。

最後になりましたが、第59回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜りました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、JASC Incの皆様、そして温かく現役の活動を支えて下さった会議OB・OGの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力を頂いた全ての皆様にご場をお借りして心より御礼申し上げます。

アメリカ側実行委員長挨拶

Morgan Swartz
Chairperson, American Executive Committee
59th Japan-America Student Conference

September 19, 2007

Being a member of the Executive Committee for the 59th Japan-America Student Conference was one of the most difficult yet rewarding experiences of my life. As I reflect upon the conference, I can see how the hard work and dedication of myself and the rest of the Executive Committee came to life with the delegates. I watched as forums that had only been in my mind before July suddenly became real and meaningful events where the conference participants learned about the world and their places in it. Friendships grew over our month together in Japan, and some of them were challenged when different ideas and perspectives clashed during discussions in roundtables or over dinner in special topics. However, because of those clashes and arguments, delegates learned more about the difficulty of inter-cultural communication and the importance of moderation and mutual understanding.

Through business visits, dinner receptions, panel discussions, and meetings with conference alumni, delegates learned more about the Japan-U.S. relationship and the many different roles that need to be filled in order for the relationship to remain strong. We made professional connections that will help us enter the working world and give us a better idea of how to achieve our goals and ambitions. Through our presentations, we made impacts upon each other and those who came to see us, influencing their opinions and perceptions of the world. These influences and connections ensure the future of JASC, and that its legacy and

impact on the future of the relationship between the United States and Japan will continue.

None of this could have been possible without substantial support from the community of people interested in the connection between our two countries. So I would like to offer my most sincere thanks to all those people and companies that dedicated some of their time and money to the success of this conference. They gave the delegates opportunities to visit their workplaces and learn about the different aspects and responsibilities of being involved in international relations. Many alumni took time to attend our forums and receptions where they met the new delegates and offered them valuable connections and resources. Without all of this help, the Executive Committee would not have been able to put together a conference that lives up to JASC's tradition. Because of their participation, JASC will continue for another year and reach out to aspiring students who wish to become mature, internationally-minded individuals who are active contributors to global society.

I could not have asked for a better 59th JASC, and my thanks again to all the delegates and supporters who worked together to make this summer so memorable.

Sincerely,

Morgan Swartz

内閣総理大臣からのメッセージ

第59回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議は、1934年の開始以来、今日に至るまで70年以上に渡り、日米の学生たちの企画・運営により活動を継続し、両国の学生間の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきました。ワシントンの日米学生会議事務局には、戦後の日米関係が飛躍的に発展する立役者の一人となり、先日惜しくも亡くなられた宮澤喜一元総理が学生時代のワイシャツ姿のスナップ写真が今も残っていると聞いています。これほど長く、戦争と平和の時代を乗り越えて続いできた学生会議は世界に類を見ません。

日米両国は、自由、民主主義、基本的人権、法の支配、市場経済という普遍的価値を共有し、強力な同盟関係を築いています。本年4月、私はキャンプ・デービッドでブッシュ大統領と会談し、「かけがえのない日米同盟」を確認しました。今後、日米両国は、この同盟関係を一層強化していくとともに、エネルギー安全保障や気候変動等の分野を含む幅広い国際的な課題に共同で取り組んでいきます。

本年の日米学生会議のテーマ「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～Advocating Japan-America Participation in Global Change」が示すとおり、日米両国は、世界が直面する地球規模の問題の解決のため、ますます緊密に連携、協力していかなければなりません。そのような日米両国の未来を担うのは若者たちであります。その意味で、この日米学生会議を通じて、国際社会において果たすべき役割や明るい未来に向けた施策について多くの提言がなされることを期待しております。

この会議が実り多いものとなり、皆さんが末長い友情を育まれる機会となることを祈念します。

内閣総理大臣 安倍 晋三

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協議会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、下記の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回（1936年）早稲田大学。第4回（1937年）スタンフォード大学。第5回（1938年）慶應義塾大学。第6回（1939年）南カリフォルニア大学。第7回（1940年）津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国からの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初め

て米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「二国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。時は折しも55年体制の成立を目前に控えた情勢にあり、3月に日米MSA協定が調印された1954年でもあった。また、1955年にはアジア・アフリカ会議が開催されている。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。結果、第1回会議当時の参加者が、半数以上の理事を務めていた国際教育振興会が日本側主催者としての責任をとることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、

序章 日米学生会議概要

米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。

1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後、日米学生会議は財団法人国際教育振興会とJASC, Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると見えよう。

過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣 宮澤 喜一 氏

1939、1940年 日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官 ヘンリー・A・キッシンジャー 氏

1951年 日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese

artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

本文中の略語について

JASC (ジャスク) : 日米学生会議 (Japan-America Student Conference) の略。

JASCer (ジャスカー) : 日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。

JASC, Inc : アメリカ側主催団体であるJapan-America Student Conference, Incの略。

EC : 実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。

AEC : アメリカ側実行委員会American Executive Committeeの略。

JEC : 日本側実行委員会Japanese Executive Committeeの略。

デリ、**デリゲート** : 日米学生会議参加者、delegation。

ジャバデリ : 日本側参加者。

アメデリ : アメリカ側参加者。

アルムナイ : 日米学生会議の過去の参加者。

サイト : 本会議開催地の意味。東京サイト等。

RT : Round Tableの略。参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。

リフレクション : 会議中、参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。